



に、中国人が半分大学におるんですね。それでその中国人と非常に交流を深め、お互い保証したり留学したりやってるんですけども、これを見ますと、愛知大学がこれから現代中国学部を中心にして中国に進出し、さらにアジアに飛躍するというようなことも考えておられる。そういうことから見ますと、大学を1つ、先ほども言いましたように大きな大学ということじゃなくて、1つの学部ぐらいから始めてやってけばいいんじゃないかと。今の理念からしますと、やっぱり私共も満州から引き揚げて愛知大学に11人入ったんですけど、その頃から日中友好をしたいと。そうしたらたまたま東亜同文書院から来られた方もみなそういうことを考えておられるから、全く考え方は同じです。確かに建国大学の場合は学生は11名おりますけども先生はいらっしゃいません。学校が新しいですから、帰られてから他の学校へ就職された方が大部分で、愛知大学に就職された方はいないです。しかしそれはあまり関係ないと思うんです。やっぱり理念が同じであればいいんじゃないかと。最初確かに京城帝大の先生方が東亜同文書院の方と同じぐらいいらっしゃいますので、確かに高井さんがおっしゃったように京城帝大がなかったらできなかつたらうというのはわかるんですけど、やっぱり作ったのは今おっしゃった東亜同文書院の本間先生以下の皆さんの努力に尽きると思いますね。私の親父も愛知県ですから皆さんが努力したことをよく知ってる。それでお前もシベリアから帰ったから愛知大学に行ったらどうかと言われて私は来たわけです。

そういうような意味で戦争直後、ご承知のように東亜同文書院にしても建国大学にしても、これは日本のアジア戦略のための先兵というようなことで中国側は認識してるんですよ。必ずしもそうじゃないかも知れませんが中国側はそういうふうに認識してます。だから戦後始まった頃にはまだ若干遠慮ということもあったかと思いますが、最近の愛知大学の中国の活動を見ますと、

もうそういうことから抜き出ておりますので、あまり心配せずに東亜同文書院、それからわれわれが母体だということやっていただいたらいいんじゃないですかね。というふうに思います。以上です。

**【司会】** はいどうぞ。

**【平田】** 今日の案内をいただいた時にパンフレットに「ルーツ校5校」とあったので、今までずっと東亜同文書院と聞いておって、そして風が変わったのかなという感じをちょっと受けたんですね。実際は先ほど大島先生が言われたように、東亜同文書院大学というのは廃絶されているわけですね。継承してはいないわけで、まあ伝統とか考え方、あるいは建国大学なり東亜同文書院なりの民族の相互尊重というようなことを継承はしておっても、先ほど誰の手柄かというような話がありましたけれども、手柄の順番でじゃあ6校目のルーツもあるはずだというふうなことになりますので、愛知大学の東亜同文書院大学記念センターという名前で今日もご案内があったわけですけども、あそこに東亜同文書院大学記念センターとあって、他のルーツ校ではなくてただ東亜同文書院とあるわけですから、一般の方は変わったのかなと。ずっと長いあいだ東亜同文書院大学を継承したというふうに言われてきて、今案内にルーツ校というのがいきなり5校出てくる。私達は当然、こういう形でみんな集まってお互いに協力し合ってきたと知ってましたけども、あらためてルーツ校5校というタイトルが出てきますと、記念センターが何か風が変わったり、あるいは考え方が変わったのかなという先ほどの私共の質問にもつながると思いますが、いかがでしょうか。

**【小崎】** 東亜同文書院大学がルーツ校であることは間違いありません。本間さんは最初は東亜同文書院大学の名前を使おうとしたんです。ところがGHQが東亜同文書院というのはもう閉校になってる、それを今生かそうというのはけしからんというので、本間さんがいろいろと努力されてる出

先にみんな付いて回ってそれを全部つぶそうとしたんです。それで愛大と同文書院とは関係ないんだという建前にして本間さんはこの大学を作る努力をされたわけです。だけど陰ではやっぱり東亜同文書院というものがなかったら愛知大学は絶対できなかったということを何回も言っておられる。その問題が消えて愛知大学は今日の隆盛を果たしているから、もう東亜同文書院をルーツ校として堂々と表へ出していいわけです。他の学校をそのまま入れるとそれは違います。それで今日のテーマで他の学校をルーツ校に入れるというのはちょっと語弊があったと思います。そうじゃなくてあくまでも東亜同文書院が中心です。それは間違いないところです。

**【司会】** まあ主催者の記念センターとしては、もちろん東亜同文書院がベースであるということは前提の上で、当時それ以外の学生の方々も来られたと。全部で80何校あるわけですから、そういう意味で5校というのはおかしいじゃないかということですけど、特別にその中でお招きした方が5校というわけで、ちょっと一般的な表現で言うと誤解を招くかも知れない。だけどまあ直接的には今日は5校と。文章の下のほうの案内文を見ていただきますとその辺のところは少し細かく書いてございますので、まあ大きなタイトルだけ見ると今のようなご意見が出るかも知れませんが、われわれは別に変節をしたわけではないということです。あといかがでしょう。まだ発言されてない方と言うと。はいどうぞ。

**【奥田】** 今お話された先生のことに関連するんですけども、当時はこの愛知大学を国立で作ろうとされた。それで先ほどおっしゃったように、マッカーサーのGHQが駄目だと言ったから仕方なしに私立大学に作られたというふうに聞いております。私は別にこの5つの学校とも愛知大学とも関係なく、戦前から名古屋にあった専門学校、昭和24年に新制大学になった学校の卒業生ですけども、結局8月15日で海外にいらっしやっ

た方が、大学にいて途中で退学、ということはないんでしょうけど学校が廃校になっちゃったわけですから、当然東亜同文書院大学の先生なり学生さんがずいぶん多かったかも知れませんが、さっきからお話が出たように朝鮮にも現在の韓国にも、台湾にも、他にもいっぱいあって今日聞いて勉強になったんですけども、そういう学生さんが結局その大学の1年生なり然るべきところで中退みたいな格好になっても卒業されるために入られたというふうに聞いたんですが、そういう形と違ってあくまでも東亜同文書院大学のために作られた愛知大学だったんでしょうか。その点だけちょっと聞いてみたいと思って質問させていただきました。

**【小崎】** 国立大学にするつもりは全くなかったですね、初めから。本間先生にはそういう気持ちは全くありませんでした。むしろ私立大学だからこそ優秀な大学になり、また優秀な学生を集めることができるという信念を持っておられました。それで東亜同文書院大学が中心になってこの大学を作ったんだけど、もちろん他からもいくらかでも入ってもらいたいという気持ちでございましたから、そこには制限は全くありませんでした。そういうことです。

**【司会】** はい。ということでよろしいでしょうか。はいどうぞ。

**【質問者】** 私は愛知大学の卒業生ですが、豊橋で授業を受けたことはありません。入学から卒業まで名古屋でした。残念ながら園部先生のお父様の講義を聞くことはありませんでした。しかし園部先生のお弟子さんで台北帝大の法文学部出身の方が行政法の講座を担当しておられて、その先生の講義を聞きました。それで園部先生にお聞きしたいのは、旧制高校と新制の制度と、全く違うわけですが、園部先生は旧制高校をどのようにお考えか、どのように評価されているのか、先生の旧制高校についてのお考えをちょっとお伺いしたいのですが。



【園部】 先ほどそのお話もちよつとしようかと思っただんですが時間が無くて。まあ懐古趣味ということではございませんが、今の日本の教育制度というのはアメリカの制度を非常に短い期間に大急ぎで入れたと。本当に今のような6・3・3・4の制度が日本の教育制度にぴったり合ってたかどうか、これは誠に疑問でございます。私はそう思ってます。しかしまあこれだけいろいろと変えられてこんなに長く50年も続いた制度ですから、それは何とかして維持していく必要があるのでしょうか、たとえば旧制の高等学校というのはアメリカで言うところのカレッジに当たるわけなんです。私も2年ほどアメリカに留学していましたが各大学にカレッジを作って、そこではあまり専門に分かれず、できるだけ自由な「リベラルアーツ」という名前が付いておりました。これは正に旧制高校の理念と少しも変わらないのであって、アメリカ自身はそういう旧制の、昔の日本のカレッジ的な制度を維持しておきながら、日本にはいきなり6・3・3・4ということで、4の部分を実はアメリカのカレッジではなくて専門と一般教養とを一緒にしたような学部を作ってしまって、そこからいろいろのところへ出ていくと。それで各県に全部国立の大学を作りました。果たしてこれも良かったのかどうか。そんなにたくさん日本に大学を作ってどうするのだという問題もあります。

日本は新しいものを作る時はできるだけ平等にたくさん作らなきゃいけないという考え方があって、たとえば私の関係で言えば法科大学院という、アメリカで言うところのロースクールで、これもアメリカの真似をして作りましたが、私はせいぜい30ぐらいでいいと。アメリカだって全体の割合から言えば各州に1つ大きなロースクールがある程度なんだから、そんなにたくさん作ることないと言ったのに74も作ってしまって、実際には非常に経営困難に陥ってるところがある。教育というのは民主的にたくさんものを作って多くの人が

受けられるようにすることも大事ですが、今の予備校の制度とかいろんな進学校とかを見ておきますと、結局競争、競争で、いろんな大学の中でさらに選択していくというようなことでは困る。やっぱり私は昔の旧制高校のような、自由で雰囲気の良い高等学校、大学予科というものをもっと維持すべきではなかったかと思います。

どうして旧制高等学校の校長会議で高等学校を廃止するというのを唯々諾々と受けて、全然反対運動が表には出なかったかというのは不思議な話ですけど、たとえば一高から八高まで見てみますと、一高の先生は東大教授になるわけです。三高の先生は京大教授になる。ところが四高は金沢大学というできるかできないか分からないような大学だったし、他もみんな五高だと熊本大学、七高だと鹿児島大学になるというと、これは先生方の中でもだいぶ違和感があったんじゃないかなという感じは致しますけども、これであれよあれよと言う間に旧制高校を廃止してしまった。私はやはり大学の制度というのはいわゆるリベラルアーツの、ゆっくり勉強できるチャンスというものを与える日本の制度で進めるべきではなかったかと。愛知大学の場合には戦後に新しい大学予科というのを作って、その大学予科の制度を維持していけばよかったんじゃないか。これは結局新制ではありましたがそれはつぶれてしまった。私はそういう意味では日本の学校制度というのはやっぱりどこか歪みがあるんじゃないかなと思っておりますが、これはまあミミズのたわごとみたいなもので、今頃そんなこと言ってもしょうがないんじゃないかと言われるんですけど。しかし教育制度というのはもっと長い時間をかけてゆっくり考えて作るべきで、その点では愛知大学というのは建学の理念というものを戦後に作って、そのルーツが東亜同文書院か京城帝大か、それはいろいろあるかも知れませんが、やっぱり1つの国際的な感覚を持った大学を作ろうという理念によってできたわけですから、ぜひそういう形での建学の

理念を続けていっていただきたいと思う次第であります。どうも。

**【司会】** はい、どうもありがとうございました。だいぶ時間が押してまいりました。そこで最後に、流れの中でまだご発言のチャンスがありませんでした谷先生と奥田先生に一言ずつ、愛知大学に期待するというあたりのところで短めにご発言いただけますか。まず谷先生のほうからお願いします。

**【谷】** 先ほどしゃべらせていただきました谷です。昭和25年に愛知大学を卒業してから、同窓会活動はやらせていただきましたけども、大学そのものとの関係と言いますと、私が名古屋地検に勤務しておった当時、愛知大学の学生と卒業生に対して、司法試験に合格するように車道の教室で1年間講義をさせていただいたという程度でして、これからの愛知大学をどうすべきかというような大きな口を叩けるような者ではございませんが、やはり特色を出すと言うならば、現代中国学部みたいに1つの語学を中心とした特色のある大学を作られるように努力をされるのが、このように大学がいっぱいある中ではやはり必要なことではないかというように思っておる次第です。失礼しました。

**【司会】** はい、ありがとうございます。奥田先生一言いかがでしょうか。

**【奥田】** 先ほど最後のほうにお話ししましたように、私は朝鮮におりました。当時は本当に不勉強で、今から思えばまだ子供だったと思うんですけども、国家総動員法とかいったあの頃の戦時教育にどっぷり浸かっていました。司馬遼太郎が『坂の上の雲』で国家というものの重さということを盛んに説いてますね。今思うと、本当に国というものがずっしりとわれわれの肩と言うか、生活の隅々までのしかかってきた非常に息苦しい生活、個人の圧殺されたああいう時代はやっぱり嫌だったなあと思います。そういう中に浸かって朝鮮の人達のことをほんとに考えたこともなかったので、戦後帰ってきて新しい教育を受け、朝鮮の人

と仲良くしなきゃいけないということを思い始めてから、朝鮮で長いあいだ朴政権や全斗煥の軍事独裁政権が続きました時に、金大中を始めとして民主化運動に全てを捧げられた方々によって、今のように非常にデモクラティックな、われわれ日本人と価値観を同じくする新しい韓国になったのを非常に嬉しく思います。韓国の人達との交流というのは非常に身近に感じるんですけど、最後にはやっぱり友好と平和ということになります。その格好の素地は先ほど来おっしゃってた建学の精神です。愛知大学はそこに活路と言うか希望を見出す、それしかないんじゃないかなという感じがしております。もうわれわれの時代じゃないですけども、これからの大学、これからの若い人達はそこをやっぱり志向していただきたいなと。大それたことを申し上げまして失礼ですけども大学の繁栄を祈念したいと思います。どうも失礼しました。

**【司会】** はい、どうもありがとうございました。予定した時間を少し過ぎておりますが、

**【高井】** ちょっと最後に2～3分。先ほど大島先生その他の方々からいろんな趣旨で、今までの東亜同文書院大学のルーツの継承校であることの方針を変えたのかというようなお話がありましたけど、私が同窓会活動をやってきました、建国大学等の付き合いがあったり、京城帝国大学の付き合いがあったり、それから30いくつの旧制高校の方々との交流があったりした中で、愛知大学はアジアへの足場がいっぱいあるんだということを宣伝しまくるのが大事だということを痛切に感じております。それはこの『東京支部五十年史』の中にちょっと書いてましたけども、私達寮歌祭に参加する活動の中で、旧制高校あるいは旧制大学予科の連中に愛知大学の認識をこじ開けてやっこさ認めてもらったという思いが強いわけです。そういう中で新しい愛知大学が今度は笹島にできると。しかもアジアに情報発信するということからすれば、5つの学校では少ないので、80のルー

ツ校があると言うべきだという、まあこれはプロパガンダの世界であります、そういう思いがものすごく募っております。

さらに愛知大学は、豊橋あるいは車道あるいは三好にあって、今度は笹島に行くわけですね。そういった中で豊橋のルーツはきっちり守った上で、やっぱりアジアへ突進していかなきゃいかんのじゃないかと。いつまでも総合大学ではいけないというふうに思ったりしておりますが、総合大学でもいいから、法律と中国に強い、あるいはアジアに強い大学だということを徹底的にやるのが、愛知大学の今までの先輩達、あるいは本間先生、あるいは東亜同文書院の方々々が苦勞なされたことに報いることだろうし、生きる道だろうと思ってます。それが世界平和につながるだろうし、日本の立場を平和につなげる最大のことだろうと。その中で思うのは、われわれが各校に宣伝する時に「どこにあるんだ」と言われて、車道にもあります、豊橋にもあります、笹島にもありますというのはなかなか辛いことなんです。豊橋をがっちりして、名古屋校舎でガンガンやることが必要だと。それだけアジアについてガンガンやらなきゃいかんと。それが愛知大学の生きる道だろうと思ってます。

たとえば29年卒のわれわれの同窓会あるいは東京支部長の先輩が言いました。「お前は愛知大学だろう。中国に強いだろう。じゃ台湾に行け」と。こうやって台湾の支店長になったそうです。愛知大学出れば中国に強いだろう、中国語もできるだろう、中国が分かるだろうと。経済学部を出ようが経営学部を出ようが、現中はもちろんのこと、どこを出ようが愛知大学は中国に強いという方向性を持った大学であるということで、しかもアジアに徹底的に売り込む。ここにいらっしゃる谷藤助さんが悔しがってるのは、俺のあとに検事が誰も愛大から任官されてない。小崎先輩が悔しがってるのは、愛大から外交官試験に受かったやつがその後続いてない。司法試験はいっぱい続

いておりますが、そんなものじゃなくて、各省庁で愛知大学の先輩がおれば、「あいつに聞けば中国のことは何でも分かる」と。だから厚生労働省で中国のことを知りたければ愛大の生徒を採ればいいじゃないかということになるというようにどうしてしないんだと。これが私の敬愛する愛知大学ロースクール初代院長の新堂幸司が私にけしかけております。「どうしてそんな愛大のいい特色を持ってどうしてそういうことをやらないんだ」と。国家公務員試験を受けさせて、各省庁に送り込んで、愛知大学の出身者を中国全部、マイナーかも知れませんが、それはアメリカと比べて。たとえばアメリカ大使館の一等書記官になるのはアメリカがいいかも知れません。マイナーな中国かも知れません。韓国かも知れません。それから台湾かも知れませんし、東南アジアの他のベトナムかも知れません。モンゴルはマニアとは言いませんけども、そういったところに愛大がじゃんじゃん送り込めるような立派な大学になるべきだと私は確信しております、そういった面で寮歌祭をやってきましたし、寮歌祭の連中と胸を張ってやってきました。そういう思いで今日も5つの各校の方々に来ていただくようなエネルギーが持たされておることを披露しまして、私の最後の挨拶とします。ありがとうございました。

**【司会】** はい。今日は正面に佐藤学長もお座りかと思しますので、いろいろお話を参考にさせていただいたというふうに思います。高井さんの先ほどの発言で一応まとめにさせていただきたいと思っております。ということで今日は長時間にわたりましていろいろありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。じゃあこれにて終わりとさせていただきますが、このあとお腹の空いた方はリュミエールのほうで懇親会を用意しておりますので、ぜひそちらのほうへお出かけください。約1時間の予定です。リュミエールは出て右のほうへ行きますと、6号館の短大のほうに近いです。案内を担当の者がいたします。